

日本の未来を映すブラジルの日本語教育

福島 青史

1. 本企画の目的

2019年4月、新たな在留資格を盛り込んだ改正出入国管理法が施行された。日本ではこれまで認められなかった単純労働分野の受け入れにも道を開き、今後5年で34万人を受け入れるという。これまで「留学生30万人計画」「技能実習生制度」等の政策を通し、すでに多くの外国人労働者が日本で働いているが、今般の動きは、より明示的に、外国人労働者政策の転換を示すものと言え、日本社会は今後より一層、外国人との共生が課題となると考えられる。一方で、このような世界のグローバル化に伴う人の移動の常態化は、日本人にとっても、留学、企業駐在等による海外滞在・移住、さらにはその子ども世代の永住・帰化、日本への還流などの現象を生んでいる。このように、現在、日本は、外国人を受け入れると同時に送り出しをする国であり、私たち個人は、国民として、外国人（≒移民）として、あるいは世界に生きる市民として、国家とそこに生きる人間の関係を改めて問う必要が出てきている。

このような時代状況の中、本企画では、2018年で移住110周年を迎えたブラジルにおける日系移民の言語とブラジルの日本語教育の現状についてとりあげる。なぜなら、ブラジル日系社会は、日本や日本の日本語教育が、今後背負うことになる課題について、日本人移民として、ブラジル国民として、日本に還流する「外国人」として、100年以上の間、人と社会、国家との関係を問い続け、今に至るからである。いわば、ブラジル日系社会の過去と現在は、日本の未来を映す鏡と言える。

本特集で問題となることの一つは、個人を「〇〇人/外国人」と規定する民族、文化、言語、国家、国籍といった近代の国民国家制に基づくイデオロギーと、これらのイデオロギーに基づき自己同定する個人の結びつきの現状である。100年を超える社会統合、同化という運動の中で、この結びつきは相対化されるのか、それとも強化されるのか。残るとすれば何が残るのか、何が消えるのか。別の表現を使えば、日本人はいつ日本人でなくなるのか、外国人はいつ外国人でなくなるのか。本特集においては、寄稿者に以下2つの問いを立て、読者への情報提供を依頼した。

- ① 移民にとっての母語はどんなものか。それは世代を超えてどのように継承されたか。
- ② 移動する個人にとって、国家、民族、言語、故郷とはどんな意味を持つか。

以下、この問いの意図を述べる。

① 移民にとっての母語はどんなものか。それは世代を超えてどのように継承されたか。

ブラジル日系人の日本語教育の今は、現在、日本の外国人子弟に対する「母語教育」、また、在外の日本人子弟（国際結婚児童含む）の「継承語教育」の未来を予見させるものである。そもそも、ブラジルにおける日本語教育は、日系移民子弟の「母語教育」として始められた経緯があり、子どもの複言語化にまつわる問題は「二世問題」として戦前から議論された問題である。また、近年、欧州・北米で関心が持たれる「継承語教育」は、主に一世から二世に対する言語教育を扱っているが、現在のブラジルの日系日本語教育（＝継承語教育）は、三世、四世の世代まで進んでいる。それは、100年に亘り日系移民として「何を継承するのか」を考え、実践された結果として現在に至る。このようにブラジル日系人の日本語教育の歴史は、「移民」子弟に対する言語教育の数世代先の事例とも言える。むしろ、20世紀移民と21世紀移民の違いは社会文化的に大きく、単純な比較は無意味であるが、現在のブラジル日系人の日本語教育は、「母語教育」「継承語教育」を研究する者に、より深い洞察を与えることが期待できる。

② 移動する個人にとって、国家、民族、言語、故郷とはどんな意味を持つか。

日本における外国人の増加は、学校や地域社会のあり方の再考を促すほどになっている。「生活者としての外国人」「外国につながる子ども」といった概念も、これらの変化に応じた専門用語として日本語教育で普及している。しかし、これらの概念は、定住を社会生活の基盤とし、移動する個人に対して、定住型社会への包摂／参入を促すものであり、移動する個人からの視点に欠ける（川上・三宅・岩崎 2018）。ブラジル側についても同様であり、日本からブラジルに帰国した「帰国者」「帰国生」という概念も、定住者からの名指しである。では、移動する個人にとって、国家、民族、言語、故郷とはどんな意味を持つのだろうか。ここでも、すでに六世代目が生まれたというブラジル日系社会の現状や、ブラジルと日本を往還する移動する個人の生活は、大きな示唆を与える。

日本における日系ブラジル人は、その祖先がブラジルに移民し、そして、再度来日しているという点で、初めて日本に来た「一世」の外国人とは異なる。また、二世以降の日系ブラジル人は、個人として空間を移動すると同時に、日系という系統的な時間の中で、国民意識、民族意識、言語意識を変容させてきた。この空間的・時間的移動は現在でも続いており、100年を超える時間軸の中で世代を超えて「人－ことば－社会」の関係を捉えることは、「いま・ここ」に生きる個人と言語の関係を考察する上で、歴史的、構造的な視点を提供できると考える。

2. 本特集の内容

本特集は、上記2つの問題意識を元に、ブラジルにおける日系人と日本語に関わる情報を提供するため、以下の7本の寄稿を得た。

1 日系移民の歴史と日本語教育：日本語を巡る過去と現在

1.1 南米日系移民と日本語—ブラジルの日本語教育を中心に—：末永サンドラ輝美

(国際交流基金サンパウロ日本文化センター)

- 1.2 現在のブラジル日本語教育の概要—公教育への日系コミュニティの貢献—:
吉川・一甲真由美エジナ (国際交流基金サンパウロ日本文化センター)
- 2 日系コロンビアの日本語教育の現在:何を継承するか?
 - 2.1 人間教育としての日本語教育—ピラル・ド・スール日本語学校の実践—:渡
辺久洋 (ピラル・ド・スール日本語学校)・松田真希子 (金沢大学)
 - 2.2 日系コミュニティの核としての日本語学校—コロンビア・ピニャール日本語モデ
ル校—:松本絵美 (元コロンビア・ピニャール日本語モデル校派遣 JICA ボラン
ティア)
 - 2.3 日系コロンビア地域における日系ブラジル人の子どものための日本語会話力:伊澤
明香 (大阪経済法科大学)
- 3 帰国生支援活動:還流する人の支援
 - 3.1 ブラジルにおける日本就労帰国者子女への支援について:二宮正人 (CIATE)
 - 3.2 カエルプロジェクト—日本からブラジルへの帰国子弟のサポート 10年間の報
告—:中川柳田郷子 (カエルプロジェクト)

以下、その概略を記すと共に、本特集の問いに即して所感を述べる。

2.1 日系移民の歴史と日本語教育:日本語を巡る過去と現在

末永論文は、ブラジルの日本語教育を中心に、南米における日系移民の歴史と日本語教育の歴史を概観する。ブラジルの日本語教育が、当初、日系子弟に対する母語教育として始まった経緯から「情操・道徳等全人教育的」な側面を持つことなど、ブラジル・南米の日本語教育の特殊性の起源について説く。当初、日本語は家族の生活を支える言語であり、民族性を含めた個人や家族のあり方を伝える媒体であった。その後、世代を経て、ポルトガル語使用が主流になる中でも、日本語はその機能を変えつつ、日系アイデンティティを象徴するものであるようだ。

このように始まったブラジルの日本語教育であるが、徐々に日本語は日系社会の専有資源から、ブラジル社会共有の言語・文化資源となる。これを示すのが吉川論文である。吉川は、最新の調査結果を駆使して、現在のブラジルの日本語教育の現状を詳細に記述する。吉川によると、90年代から日本語教育における日系人の寡占状況は終了し、特に公教育においては非日系の学習者の割合が増加し、2017年調査では高等教育における学習者の74.4%が非日系人である。教師の日系人率が高いのは、歴史性によるものであると言えるが、今後、現在学習中の非日系の学習者が日本語教師になる可能性もある。各教育機関の端緒を探ると各所に日系社会の関与が見られるが、これらの努力が日本語をブラジル社会に浸透させ、ブラジル社会の言語資源、文化資源として受け入れられる基盤を作ったと言える。

2.2 日系コロンビアの日本語教育の現在:何を継承するか?

では、現在の日系の日本語教育はどのようなものであろうか。この問いに答えるのが、

渡辺・松田論文、松本論文である。渡辺・松田論文にある「人間教育」、松本論文の「コミュニティの核」という語は、現在の日本語学校の特徴を表している。ピラール・ド・スールもコロニア・ピニャールも日本語学校の創立は第二次世界大戦後だが、それぞれ50年以上の歴史を持つ。2つの日本語学校で強調されるのは、日本語ではなく、日本語により媒介される「人間性」である。それは、ブラジルの生活・文化を基盤とし、日系コミュニティの文化・習慣を取り入れた信条、関係性、積極性、柔軟性、創造性といったものであり、過去に根ざしながらも、未来志向である点で共通している。よって、ここでの「継承語」とは、「日本語」といった言語そのものというより、自分と自分自身の両親、親族、コミュニティの文化、価値観、関係性をつなぐものであり、善き生を形成する媒体である。日本語学校で継承されるのは、未来に生きるための人間性であり、それは、次世代が自己の存在を知るための記憶、過去に生きた人のそれぞれの生き様、肖像と言えるだろう。

伊澤論文は、上記のような日系コロニア地域の子どもの日本語会話能力の実態を明らかにしたものである。調査によると、日常会話レベルにとどまる地域や、教科学習言語能力まで身につけている地域があるなど、地域により様々であることがわかる。かつて日系移民の母語であった日本語は、世代を経るにつれ、社会的に使用される場面が制限され、家庭やコミュニティの中の、限定された機能のみを果たすものに変化している。そのような傾向の中で、未だ日本語によるコミュニケーション機能を保持しているコミュニティがあり、非常に高い日本語能力を持つ人材を輩出していることは刮目に値する。さらに、日本語によるコミュニケーション機能が低下した地域においても、アイデンティティ機能である精神性や文化は日本語教育により継承されており、重要な文化資源として機能していると言えよう。また、伊澤論文で示された帰国生の存在は、日系社会の言語環境を変容させている。日系社会では、世代を経てポルトガル語の能力が高まるにつれて、日本語能力の低下が懸念されていたが、日本語母語話者である帰国生が日系コミュニティに加わるようになったことは、言語的・文化的に大きな影響を及ぼしている。一方で、帰国生自身が、ブラジル社会に参入するためにポルトガル語能力が問われることもあり、日本語のみならずポルトガル語をいかに身につけるかも、ブラジル日系社会の言語教育の課題となっている。

2.3 帰国生支援活動：還流する人の支援

二宮論文と中川論文は、この帰国生に対するブラジル側の対応の報告である。二宮論文では、ブラジルに帰国した帰国生に対する大学就学支援や、日本における学習状況や支援内容について書かれている。移動する個人にとっては、日本とブラジルを往来し、異なる言語、学校文化、学習言語の習得などの様々な課題に対峙し、学習を継続させ、成果をあげ、高等教育機関まで進学するのは容易なことではない。日本においては、日系ブラジル人子弟の学習支援についてしばしば報告されるが、彼/彼女らが、ブラジルへ帰国した後の継続的な支援についてはあまり知られていない。移動する個人にとっては、国家、民族、言語、故郷は常に複数化され、どちらか一方の社会の規範から規定できない。二宮氏の活動は、日本とブラジルを移動する帰国生を支援し、両国で育て、高度人材として社会参加を奨励する活動と言える。

中川論文は、より年齢の低い児童を対象とした「カエルプロジェクト」の活動報告である。出稼ぎにより移動を余儀なくされた子どもの言語（ポルトガル語）の問題をはじめ、移動に伴う異文化接触による心の問題など、子どもを巡る多くの困難な状況が報告されている。中川論文を読むと、言語・文化の異なる2つの生活領域を行き来する際の環境変化の苛烈さ、それに対する子どもの脆弱性がわかる。二宮氏、中川氏両氏の活動は、移動する個人が、異なる社会に参入する際の課題と困難さを物語る。そして、これは移動する個人とその家族だけの課題ではなく、ブラジル、日本双方の地域・コミュニケーションの課題であり、個人の生の時間軸ではなく、世代をまたいだ複数の時間軸の中で対応すべき課題であろう。

以上、各論は、2つの問いに明示的に回答を与えるものではないが、今後、日本に移動した個人が直面する課題を世代を超えたスケールで考察する視点を与えるだろう。移動する個人にとって、国家、民族、言語、故郷は複数化するが、越境される異なる領域は、2つであると同時に1つのものである。移動する個人を引き裂くブラジル・日本を1つの連続した領域として捉え、ポルトガル語・日本語の境界を廃し、移動する個人のあり方そのままの状態でいかに自らの生を遂行するか。それを受け入れる定住型社会とその成員は、それをどう受け入れるか。これらの課題は「外国人」を受け入れる日本の現実的な課題であるとともに、思想的な課題でもあると考える。

参考文献

川上郁雄・三宅和子・岩崎典子（編）『移動とことば』くろしお出版

（ふくしま せいじ 早稲田大学大学院日本語教育研究科）